

婚姻儀礼の変遷と現代

佛敎大学文学部敎授

八木 透

はじめに

婚姻は人類普遍の営みである。しかし婚姻をめぐる諸儀礼に目をやると、時代、地域、階層等によって大きな差異が見られる。婚姻とは、単なる男女の結びつきという意味のみならず、制度・習俗・慣行・行為・経済・権利などを広く包含する社会的対象であり、そこにはたとえば男女双方の家族や親族という集団の関係性も含まれる。よってそれぞれの時代や地域における家族制度やジェンダーなどのイデオロギーによって、婚姻儀礼の形態や認識に差異が生ずるのは当然である。

そもそも日本の婚姻は、何段階もの儀礼を経て最終的に確定するものであり、それ相應の期間を要するものであった。かつて日本の広い地域で見られた妻問い形式の婚姻では、男女の出会いから個別交際に発展し、双方の親や親族の承諾儀礼を経て、やがて夫の家に妻が引き移るまでには、長い場合には数年以上の年月を要した。それが嫁入婚の形式が普及するにつれてその期間が短縮され、ついには一日ですべての婚姻儀礼を済ませてしまうという形式に変化してきたのである。また婚姻において神道やキリスト敎などの宗敎的な儀礼が一般に普及するのは決して古いことで

はない。結婚披露宴も、ホテルや総合結婚式場などの施設が使用されるようになるのはごく近年のことで、都市部においても、少なくとも一九五〇年代はじめ頃までは、婚姻儀礼は家で行われていた。

一昔前の結婚披露宴では、一番膳といわれる主宴には婿と嫁双方の濃い親類の男性だけが出席し、双方の母親も含めた女性は別の日に改めて招待されるということも多かった。さらに妻問い形式の婚姻では、嫁入りといえば、もう二人が夫婦になって何年も経ていることが多く、嫁が小さな子どもを連れて嫁入りしてくることも稀ではなかった。そのような場合には、披露の席には嫁の両親はもとより、婿本人も野良仕事や漁に出ていて不在であることが通例であった。

ここ数十年の間に、結婚のあり方や形式はめまぐるしい変化を遂げてきた。最近の若者たちの間では、仲人を立てずに友人や仕事の同僚たちの前で夫婦の契りを誓う「人前結婚」という形式が増加している。中には双方の両親や親族を一切招待しない結婚披露宴も多くなりつつあるようだ。また披露宴においても、かつては新郎新婦がゴンドラに乗って空中から入場してくるなどの、奇抜で派手な演出が目立ったように思うが、最近では比較的地味で、手作りの披露宴が人気を集めていると聞く。

このような婚姻儀礼の変化を踏まえて、本小論では日本の近代から現代における婚姻儀礼、特に結納・初婚入り・神前結婚式・結婚披露宴・恋愛と結婚の相関性を中心に、民俗学的視座から考察することによって、婚姻儀礼の変遷過程を理解し、また今日の婚姻儀礼の意味について摸索するための一助としたいと考える。

一、婚約と結納

少し前までは、婚姻といえば仲人の依頼、親族の顔合わせなどを経て、その後結納が行われるのが一般的だった。

結納には何百万円もの費用を費やしたという話をよく聞いたものである。しかし最近の若者たちの間では、仲人のいない結婚式や、両親や親族がまったく関与しない披露宴など、伝統的な婚姻儀礼と比べて略式の婚礼を行う者が多い。中でも一番省略されつつあるのが結納である。現代の若者たちにとって、結納はあまり必要な儀礼であるとは認識されていまいようだ。

もともと結納とは、婚姻に先立つて婿方が嫁家へ持参する物品、もしくはその儀礼を意味した。結納は古くは「エヒノモノ」とよばれ、婿入婚、すなわち婿の嫁家への初入りである「婿入り」の儀礼をもって開始され、当面の夫婦の寝所が嫁家におかれるような妻問い形式の婚姻においては、婿が初婿入りの際に持参する酒肴を意味したとされる。「結納婚」と称して、初婿入りの際に婿自身が酒肴を持参して嫁家を訪問したという報告は広い地域から聞かれる。

結納について、柳田國男は「所謂結納は当事者の身に附く物を贈った故に、或は娉財と混同せられたけれども、主として持つていかれたのは酒であり肴であった。本来は贅自身が之を携えて、新婦方の親族と共同飲食したことは、寧ろ中世貴族の（処現わし）、一名露頭（1）の式と同じだったのでは無いかと思う」と述べている。また結納の語源に関しては、婿方から嫁方へ婚姻の申し入れをするという意味の「言い入れ」に発するという説や、労働交換の慣行としての「結（ユイ）」と同義語であるとする説もある。このように、結納は簡素な酒と肴、あるいはそれを婿方の家族と嫁方の家族が共食することであった。また民俗社会の婚姻では、古くは結納などということは一切しなかったという事例も多くあるように、必ずしも一般的ではなかった。

具体事例をあげて考えてみよう。たとえば瀬戸内海の離島である兵庫県飾磨郡家島町の坊勢島では、古くから若者と娘との自由な恋愛が婚姻への出発点であった。ひとりの若者が特定の娘に恋をし、娘の気持ちもその若者に向いてくると、やがて若者は適当な日に、「シルシ（印）」と称して何らかの品物かわずかなお金を娘の所に持つてゆく。娘がこれを受け取れば、相手のプロポーズを受けたことになるが、実際には事前に十分に話をつけて意思を確認してお

くので、娘がシルシを受け取らないということはめつたになかった。これが済めば、本人たちは婚姻を前提とした個別の交際を開始した。この島では「シルシ」が古くは結納に相当する儀礼であつたようだ。島の古老の話によれば、昔は二人の結婚の意思を確認し合う、いわゆる婚約に相当する儀礼はシルシだけであつたのが、戦後になると、シルシの後に改めて結納を贈るようになったという。本来のシルシの意味が忘れられたためであろう。これなどは、古い結納のあり方とその変遷を示す典型例ではないかと思う。

歴史的に見ると、戦国時代から江戸時代にかけての武家社会で、いわゆる嫁入婚が普及してくると、結納はそれぞれの家の格式に相応した金品の贈答を意味するようになる。そうなると結納は、当然酒肴だけではなく、花嫁の華やかな衣装や帯、その他の装飾品一式を取り揃え、仲人を介して仰々しく贈ることが一般化してくる。一方嫁家では、届けられた結納の額とその家の格に見合った嫁の荷を準備し、嫁入り以前に婿家へ届けることが習わしとなつていった。また時代が下るにつれ、結納は物品から金銭へと変化してゆく。「帯料」や「袴料」などという語が登場するのもそのころからである。

このように結納は、もとは婚姻によって新たに結ばれる男女の結合を確認するための簡素な贈答儀礼であつたのが、嫁入婚ではその意味が変化し、一面では嫁の労働力を婿家に組み入れることに對する代償の意味を有するようになり、またその婚姻が、もし婿方の一方的な都合によって破綻した時のための「保障」という意味も付加されるようになっていったものと考えられる。

二、初婿入り儀礼の意味

「嫁入り」という語が婚姻そのものを意味することもあるように、種々の婚姻儀礼の中で嫁入り儀礼は重要な意味

を有している。一方で「婿入り」儀礼も実は非常に重要な意味を持っていた。特にはじめて婿が正式に嫁家を訪問する儀礼、すなわち「初婿入り」儀礼のもつ意味は大きい。九州北部地域では「朝婿入り」あるいは「朝婿に夕嫁」などと称して、婚礼当日の朝に初婿入りが行われていた。名称は別として、内容的に同様の事例は全国に広く分布しており、地域によってゲンザン（見参）・シュウトナノリ（舅名乗り）などもよばれている。しかし初婿入り儀礼は必ずしも嫁入りに先立って行われるとは限らない。たとえば富山県では初婿入りを「ウツチャゲ」とよぶが、それが行われる時期は少なくとも婚礼後半年から一年近くを経た後のことであった。大間知篤三によれば、ウツチャゲは古くは夫婦に子どもができるか、あるいは嫁が妊娠した後に行われるものであったという⁽³⁾。ウツチャゲを済ませるまで、やむを得ない場合を除いて、婿が嫁の家を訪問することはなかった。さらにウツチャゲでは、ヨメドリと称せられる嫁の引き移り儀礼の祝宴にかかった以上の費用を費やし、もつとも盛大に行われるべき儀礼であったという。富山県の射水地方には、ウツチャゲの様子に対して「シヨンベケがアマへあがる（小便桶が屋根裏へ上がる）」という俚諺が伝えられている⁽⁴⁾。これはどんなに劣った婿でも捧げ奉るかのような待遇をしなければならぬという意味であろう。それほどまでに、ウツチャゲは嫁方にとって気を使わねばならない、大変な儀礼であったことがうかがえる。

また福井県越前地方では、婚礼の三日後か五日後に行われる「三日戻り」あるいは「五日帰り」などとよばれる嫁の里帰りに時に、婿も同行して、婚礼と同様の盛大な披露が行われ、これをムコヨビ（婿よび）⁽⁵⁾とよんでいる。ここでも、婿はムコヨビが済まないうちは決して嫁の生家へ行くことはなかったと伝えられている。また若狭の美浜町では、ムコヨビと同様の儀礼をムコドリ、あるいはアイヤケという。アイヤケが済まないうちは、婿が嫁の生家へ行くことは許されず、そのために嫁の親が死亡するまでに必ずアイヤケを済ませなければならなかったという⁽⁶⁾。なお滋賀県湖北地方や湖西地方でも、同じような儀礼をアイヤケと称する事例が見られる⁽⁷⁾。

富山県のウツチャゲは「打ち揚げ」の意であり、すべての婚姻儀礼の締めくくりを意味する儀礼であったと考えら

れる。また同時にこの儀礼は、初婚入りも意味していたのである。福井県若狭地方のアイヤケは「相舅」、すなわち一般には婿と嫁双方の親あるいは親族を意味する語であるが、ここではそれが婚姻儀礼の最終段階としての初婚入りの意味として用いられていたのである。なお富山県や福井県でも、近年は嫁入り以前に結納の儀礼が行われているが、その時には当然婿本人は同席せず、仲人と婿方の親族のみによって行われている。

このように全国的に見ると、初婚入りは必ずしも嫁入りに先立って行われるものとはいえず、ウツチャゲやアイヤケのように、それが婚礼後相当期間を経た後に行われるべき儀礼であったという例も見られるのである。初婚入りの儀礼が、婚姻の過程のどの段階で行われるかということは、その婚姻の性格や婿家と嫁家の関係を知る上で重要な指標となる。また初婚入りは、少なくとも婿がはじめて正式に嫁の両親と対面し、婚姻の承諾を得ることが目的であるが、必ずしも今日のような結納の儀礼と同質のものではなかったことがわかる。

三、婚姻儀礼の変化

冒頭でも述べたように、婚姻において神道やキリスト教などの宗教的な儀礼が一般に普及するのは戦後のことである。また披露宴も、ホテルや結婚式場などの施設が使用されるようになるのは近年のことである。かつての婚姻の儀礼には、宗教的な色彩はきわめて希薄だった。すなわち、家で行なわれる夫婦の杯・親子の杯・親類の杯が今日の「結婚式」にあたる儀礼であった。そこでは仲人と数人の親族が世話をするだけで、今日の形式から考えるときわめて簡素なものであった。

筆者は、かつて京都市近郊の長岡京市において、戦後のめまぐるしい経済成長と生活の変化の中で、人々の暮らしと種々の儀礼がいかに変化をとげていったかを探るための調査を実施したことがある。本節ではそのデータをもとに、

何らかの宗教的な「結婚式」を行なうようになったことがわかる。

次に結婚披露宴に関して、【図2】からわかるように、昭和三十四年頃までは、約八十五パーセントが家で行っていたのに対して、昭和三十五年以降、近所の公民館や料亭などで行ったという例が増え始める。これはその頃から、婚礼の披露などの大規模なセレモニーは、準備や後片付けなどで手間のかからない施設で行なうという傾向が一般化してくる時期に相当する。さらに長岡京市では、この頃に村内の公民館が増改築されたり、昭和三十五年に京都府立

図1 結婚式の場所

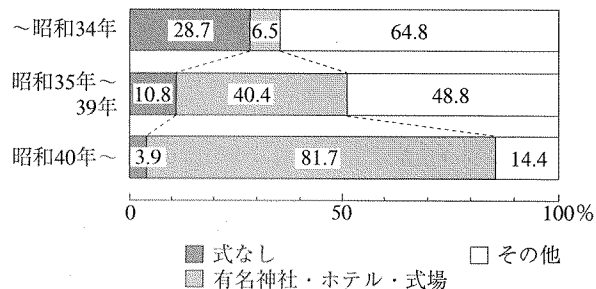
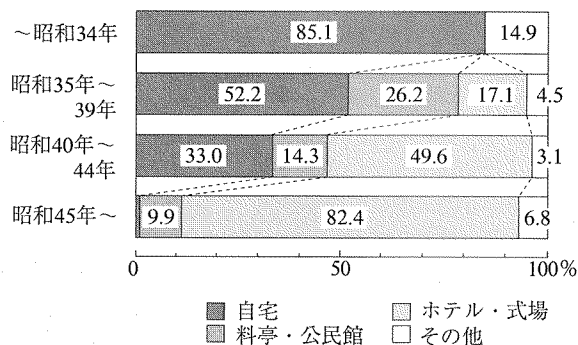


図2 披露宴の場所



婚姻儀礼がいかなる変化を示したかについて、統計資料を用いながら紹介しよう。

まず「結婚式」をどこでどのようにして行ったかという質問に対して、【図1】からわかるように、昭和三十四年までは「そのようなことはなかった」と答えた人が約三十パーセントを占めている。それが昭和三十五年以降、結婚式をしなかったという事例は、約十パーセントに減り、代わって有名神社やホテル、総合結婚式場などの施設で行ったという例が急激に増え始める。それが昭和四十年代以後になると、有名神社やホテル、総合結婚式場で行ったとする例が八十パーセントを越え、ほとんどの人が

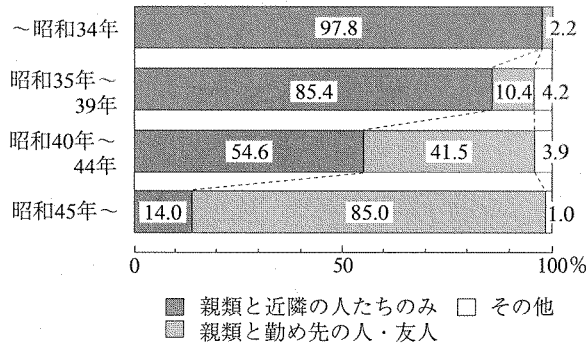
長岡労働セツルメントがオープンし、その会議室が婚礼の披露宴に利用されるようになったことと関連があるように思われる。

昭和三十九年以前は、婚礼の披露に京都市内の総合結婚式場やホテルを利用する例はごく希であったのに対し、昭和四十年代に入ると、披露宴を家で行う例と、近所の公民館や料亭で行う例と、総合結婚式場やホテルで行う例とがほぼ同数となり、昭和四十五年以後は、家で行う例はほぼ皆無となる。

このような披露宴の場所の変化にもなつて、その内容にも大きな変化が現われる。すなわち、会場の規模が大きくなり設備がよくなるにつれて、披露宴の参加者の数も増加し、また家で行われていた時には不可能であったような、趣向をこらした演出が登場してくる。

また披露宴の場所が徐々に変化してゆくのにともなつて、参加者の層にも大きな変化が現われる。すなわち披露宴にどのような人たちを招待したかという質問に対して、【図3】からわかるように、昭和三十四年までは、親類と近隣の人たちのみとする例がほぼ百パーセントであるが、昭和三十五年以後は、親類や近隣の他に勤め先の人や友人が増え始め、昭和四十五年以後は、親類や近所の人よりも、どちらかといえば勤め先の人や友人を重視する傾向がうかがえる。また宴の主役も、それまでの親類や近所の人から仕事仲間や友人に移る。このような変化の背景には、披露宴の場所の変化とともに、地域の人々の生業の変化が大きく影響していると思われる。すなわち農業が中心であった生業形態から、特に若い人たちにはサラリーマンが増え、それ

図3 披露宴の招待客



につれて人々の結びつきの原理が変化してきたものと考えられる。さらにかつての婚姻はあくまで家と家との関係であつたのに対し、家意識が希薄となり、婚姻もどちらかという個人と個人との関係としてとらえられるようになったことも関連があると思われる。しかし、昭和四十五年以降でも、披露宴に親類と近隣の人たちだけを招待したという例が十四パーセントあり、また勤め先の人や友人と同様に、親類や近隣の人たちも重視するという例もあり、かつての伝統的な人間関係の原理が完全に消滅してしまつてはいないことがわかる。

このように、長岡京市における人々の日常生活は、昭和三十年代を境にして大きく変化したことがうかがえる。それは日本の高度経済成長の時期とほぼ一致する。すなわち市内のあちこちに新しい住宅が建ち始め、それにともなつて人々の暮らしかつ集落の景観も徐々に変わり始める。それまでの農業を中心とした生業形態が兼業農業へと変化し、並行して交通機関の発達と会館・病院などの様々な施設、さらに葬儀屋などの業者の進出が目立つようになる。そうなるに従来は家を中心として行われていた種々の行事や儀礼も、家から外の施設へと移つてゆく。またその時期に家屋の建て替えや改築が進められたことも関連しているのであろう。

四、神前結婚式のはじまり

近年の結婚式は、キリスト教式と神道式がもつとも多いといわれている。稀に仏教式の結婚式も見られる。確かにほとんどのシティホテルでは、神社の神殿とキリスト教の教会を模した施設を設け、神主や神父・牧師と契約して、ホテル内で宗教的儀礼としての結婚式から披露宴まで、すべての婚姻儀礼を行うことができるようになってきている。キリスト教式の結婚式が普及するのが新しいことは比較的容易に想像できよう。しかし神社で神主を司祭者として夫婦の契りを結ぶ、いわゆる神前結婚式は日本の伝統的な結婚式のスタイルであり、ずいぶん古くからあつたものと考え

られているようだが、はたして神前結婚式はどこまで遡れるのだろうか。

結論からいうと、近世には神前結婚式は存在しなかった。それは明治以降になって始まったものである。神前結婚式の起源は、明治三三（一九〇〇）年五月十日の、時の皇太子嘉仁親王すなわち後の大正天皇と、九条道孝の娘節子との婚儀が最初であるといわれている。当時の皇太子の婚儀の様子を『明治天皇紀』では次のように記している。

十日 皇太子嘉仁親王、従一位大勳位公爵九条道孝の女節子と成婚の禮を修む、是れより先四月二十七日、皇太子、使を道孝の第に遣はして成婚の期日を告げしめ、尋いで昨九日申ねて使を遣はして御事並びに御劍を節子に賜ふ、同日皇后亦御使を道孝の第に遣はし、勳一等寶冠章を節子に授けたまふ、是の日早旦式部職、賢所・皇靈殿・神殿を祭りて皇太子成婚の事を告げ、次いで午前七時再び賢所を祭る、皇太子及び皇太子妃、前後賢所に詣り、各々綾綺殿に入る、八時四十分皇太子、妃と俱に賢所を拜し、躬ら御告文を奏して後、神酒を神前に受く、式部官、賢所大前の禮畢れる由を天皇・皇后に白す、此の時陸海軍一齊に禮砲を行ふ、次いで皇太子・皇太子妃、皇靈殿・神殿を拜す、皇族及び大勳位以下文武官僚儀に列す、十時四十分天皇正装して皇后と俱に内廷謁見所に出御したまふ、皇太子・皇太子妃、式部長の前導にて御前に詣る。⁹⁾（後略）

この記述からわかるように、嘉仁親王と節子妃は皇居内の賢所・皇靈殿・神殿において婚儀を行ったことがわかる。この賢所・皇靈殿・神殿とは一般に宮中三殿といわれる神殿で、賢所は天照大神を、皇靈殿は神武天皇から歴代の天皇と后妃・皇親などの諸霊を、神殿は諸神すなわち八百万の神々をそれぞれ祭っている。嘉仁親王と節子妃はこれらの神殿に詣でて成婚の儀を執り行ったのであり、これはまさしく神前結婚式であったといえる。

一般には上記の嘉仁親王の婚儀が神前結婚の始まりとされているようだが、実はそれ以前にも神前結婚式は行われ

ていた。『明治事物起原』に次のような記載がある。

明治八年五月二日、美濃國武儀郡關村戸長兼神風講社副社長山田精一郎の弟平三郎と、同國厚見郡今泉村渡邊武八郎三女れんの兩人、精一郎宅に於關村春日神社祠官跡部眞志雄を監婚者となし、五儀略式婚姻式に據り、合昏の禮を修めし事。(後略)

この記述から、明治八(一八七五)年五月二日に、美濃國武儀郡關村、今日の岐阜県関市で、山田平三郎と渡邊れんという男女が春日神社の神官を監婚者として、略式の神前結婚式を行つたことがわかる。明治八年といえは上記の嘉仁親王の婚儀が行われた年より二十五年も前のことであり、どうやら正確にはこれが日本における神前結婚式の始まりだといえるだろう。明治初期に美濃という地域で神前結婚式が行われた背景について『明治事物起原』には、「明治七八年頃、無暗に佛教を壓迫し、神道を保護したる事あり、従つて唯譯も無く、葬禮なども、佛式を廢して神式を執るもの有りき、次の結婚式の如きも其一例なり」と記されており、明治政府の神仏分離政策の下でおこつた廃仏毀釈の影響により、日本ではじめて神前結婚式なるものが行われるようになったことがわかる。後に嘉仁親王の婚儀の影響により、明治末期以後に神前結婚式が一般に広まったと考えることが妥当であろう。たとえば嘉仁親王の婚儀とほぼ同時期に、日比谷大神宮、後の東京大神宮が一般人を対象とした神前結婚式を行うようになったといわれており、おそらく多くの人たちが皇族にあやかうとして神前結婚式を行うようになったものと考えられる。しかしそれは東京などの大都市の、ごく一部の人たちの間での流行であり、一般の婚姻において宗教儀礼が普及するのは戦後のことである。

五、恋愛から見合いへ

日本における配偶者選択の方法に関して、多くの人たちは、古くは「見合い結婚」が主流であったのが、戦後になって「恋愛結婚」が徐々に普及していったと認識してはいるのではないだろうか。だとしたらその認識は誤りである。実際には日本の広い地域で、戦前には「恋愛結婚」が主であったのが、戦中から戦後に「見合い結婚」へと変化したのである。

明治から大正、昭和、そして戦争を経て現代へ至る過程において、配偶者の選択方法にも大きな変化が見られた。その一例を大阪府南部の泉州地域の事例を用いて考えてみたい。泉州地域の村々では、おおむね大正十二(一九二二)年頃を境として、それ以前に生まれた人たちと、それ以後に生まれた人たちとの間で、青春時代の経験に大きな差異が見られる。前者の人たちのほとんどは、若い時期に恋愛をして結婚したという経験を持つが、後者の人たちは恋愛をまったく経験せず、親が決めた相手と結婚したという例がほとんどである。このことを婚姻年齢におきかえて考えてみると、平均婚姻年齢を二十五歳前後と想定した場合、だいたい戦前から戦中に結婚した人たちの多くは、若い時期に恋愛を経験しているが、戦後に結婚した人たちはほとんど恋愛の経験がないことになる。これは一つには、昭和十年代後半から激化してゆく戦時体制の影響と、徴兵による若者人口の減少に起因するものと考えられるが、一方で戦中から終戦の時期を境として、この地域における未婚の男女交際のあり方や、若者の恋愛観や結婚観に大きな変化があったことを示しているといえよう。すなわち戦前まではほとんどが村内婚であり、他村から嫁に來たり他村へ嫁ぐ者は稀であった。たとえば大阪府泉佐野市の一農村では、村内の婚姻をムラエン(村縁)といい、他所から嫁に來た者はトロモン(古いという意味)あるいはタシヨモン(他所者)とよばれて馬鹿にされることが多かった

という。終戦後しばらくの時期には、他所から嫁に来た者は村で数人しかいなかったもので、婦人会の寄り合いなども、よく知っている人が誘ってくれないと行きにくく、さまざまな面ですいぶん辛い思いをしたという。また戦前は恋愛が一般的で、お互いに好きあつて結婚する例が多かつた。男女が出逢う機会は夏の盆踊りであつた。当時は自分の村だけでなく、近隣の村々の盆踊りにも出かけたので、その際に村の娘が他村の若者にかまわれないうちに村の若者が同行した。娘と同数程度の若者がいっしょに夜道を通いながら数多くの村々の盆踊りを回り歩くので、必ずといってよいほど特定の男女の間に恋が芽生えた。このように盆踊りでの出逢いをきっかけとして恋愛に発展していった例が多かつたという。男女二人の意思が固まってくると、やがてアシイレ（足入れ）を行う。これはいわゆるヨバイ、あるいは半公認の「妻問ひ」に相当する行為で、若者が娘の家へ毎夜泊りに行く慣行を指す。この場合には当然娘の家の者も気づくが、たいていは見て見ぬふりをするので、若者は堂々とアシイレをしたという。アシイレにまで至つてから親が反対したという例はほとんどなく、多くはたとえ反対したい気持ちはあるがあきらめて認めたという。アシイレの間にもし娘が身ごもつたらすぐに婚禮の式をあげるので、婚礼前に出産したという例はなかつたという。戦前まではこのようなアシイレが一般的で、婚礼の式をあげる以前に当人たちは実質上の夫婦になつており、双方の家族や親族もこれを事実上公認していたのである。

ところが、戦後になると近隣の村々にいる未婚の若者や娘を紹介してくれる、いわゆる「プロの仲人屋」ともいふべき者が現れるようになる。多くの若者や娘たちは、親の指示によつてこのような仲人屋の仲介で見合いをした。見合い結婚とはいへ、実際には婚礼の日まで相手と話したこともないというわけではなく、当時の青年団は処女会が合併されて男女混合であつたので、秋祭りの際に行われた青年団主催の素人芝居などですでに顔見知りであり、二人で映画を見に行つたりするようなこともあつた。しかし婚礼までにアシイレをして一緒に泊ることはなかつたという。つまり、婚姻以前に二人の間に性関係があることはまったくありえなかつたのである。なお戦後には親のいいつけで

嫁がされ、相手の顔は見知ってはいても、婚礼当日まで話をしたこともなく、いうならば嫌々ながら嫁いだという例も見られるようになる。

このように、戦前と戦後とでは婚姻形態に大きな差異がみられる。すなわち戦前には、盆踊りのような、若い男女が出逢い恋を育む機会があつた。そしてアシイレという、いわゆる妻問いを経て、やがて嫁入りが行われるという婚姻が一般的であつた。しかし戦後になると恋愛はほとんど見られなくなり、それは不埒な行為であると認識されるようになっていった。そうなる¹²と当然アシイレも行われなくなる。ここでは「結婚は親が決めた相手とするもの」という常識が生まれ、「見合い」という新しい男女の出逢いの機会が設けられるようになった。中には見合いもせず、婚礼の席ではじめて相手と出逢うという例もあつた。このような変化は、村内婚から村外婚への変化と対応していると思われる。すなわち戦前は大半の例が村内婚であり、だからこそ妻問いも可能であつた。しかし戦後になって村外婚が増える¹²と見合いの必要が生じ、必然的に妻問いも行われなくなつていったのである。戦後に見合いで結婚した女性の中には、アシイレという妻問い形式の婚姻は、戦前のある一時期に行われた、一種の流行としての婚姻形態であると認識している者も多い。

上記の泉州地域のような例は決して珍しくはない。これまでの豊富な民俗学の成果から、関西のみならず日本の広い地域において、明治から大正期に恋愛があたりまえに行われていたという事実を確認することができる。かつての日本には、多くの人たちが想像する以上に豊かな「恋の文化」が存在していたのである。それが昭和になって徐々に否定されるようになり、「見合い結婚」が主流となつていったのである。もともと昭和四十年代以降になると、「自由」を標榜する新しい価値観に立脚した男女関係が普及し、若者たちの間で恋愛が当然のように行われるようになってのは周知のことである。しかし近年になってまた「見合い」が流行しつつあるようだ。たとえば筆者の住む京都市内のマンションの郵便受けには、結婚相談所からと思われるダイレクトメールがよく入っている。見るとインターネ

ットや電子メールを利用して見合い相手を紹介する業者のものである。また新聞にも「結婚相手を紹介します」という見合い斡旋の広告がよく掲載されている。これほど自由な男女の出会いが可能な時代に、なぜわざわざコンピューターという人の肌の温もりが感じられないようなメディアを利用して、結婚相談所のような第三者に頼る必要があるのだろうか。IT化が極端に普及した今日、逆に恋愛音痴が増えているのだろうか。このような現状も含めて考えると、日本では「恋愛結婚」―「見合い結婚」―「恋愛結婚」―「見合い結婚」という過程を辿っているのかもしれない。すると今後の配偶者選択はどのような変化を示すのだろうか。欧米諸国のように、「婚姻」という営みに対する認識そのものにも大きな変化が現れるのだろうか。

六、むすびにかえて――婚姻儀礼の現代――

最近の若者たちの結婚式や結婚披露宴には、新郎新婦が主催し、両親や仲人がいないスタイル、友人たちが主催し、会費制で執り行われるものなど、多種多様な形式が見られる。このような結婚披露宴の形式には、実は地域性が顕著であり、たとえば北海道ではずいぶん以前から会費制の披露宴が主流であった。

もう二十五年以上前のことになるが、札幌出身の友人が九州出身の女性と結婚することになり、京都で会費制の披露宴を行った。私にはある程度結末は読めてはいたが、せっかくの企画に要らぬ助言をすると失礼になるかと思いついて黙っていた。その当時、京都で会費制の披露宴を行うとどういふ事態がおこるかといえば、招待客は当然決められた会費を払い、会費とは別に相応のお金を御祝儀として包む。結果は予想通りの事態となり、私の友人夫妻は困り果て、結局披露宴が終わってから、御祝儀を別途にくれた人たちには会費を現金書留で送り返す羽目になった。こんなことなら最初にアドバイスしておけばよかったかと後悔した記憶がある。このように、ある地方では当たり前に通じるこ

とも、他地域ではそうはいかないということは他にも山ほどある。しかし現在では全国どこでも、友人中心の会費制の結婚式が定着しつつあるようだ。これからの婚姻儀礼はますます地域性が希薄になってゆくのだろうか。

最近では、さまざまな儀礼の場における若者たちの行動が話題になっている。たとえば毎年のようにマスコミによって報道される、成人式での若者たちの無秩序な振る舞いは目に余るものがある。彼らも、まさか自分の結婚式の場で同じような振る舞いはしないだろう。その意味では、通過儀礼の本来の意味が忘れられ、人生の秩序そのものが形骸化しつつある現代において、婚姻儀礼だけはまだ秩序を保っているのかもしれない。成人儀礼はそれまで子どもであった者が大人の仲間入りをするための重要な儀礼であり、そこには「大人」としての社会的責任をとまなうがゆえに、その儀礼は重要な意義を持つ。また婚姻儀礼は、それまで他人であった男女が「夫婦」という社会的関係を取り結ぶ機会に行われる儀礼であり、そこには夫として、妻として、また未来の親としての責任をとまなっている。

人生におけるさまざまな選択肢が可能となった現代、通過儀礼のあり方やその意味も変化するのは当然であろう。しかし人生における秩序まで喪失させてはならないのではないか。昔の暮らしと違って、何もかもが超高速で動いている今日、通過儀礼は、一時でも走りを止めて、過去を想起し、現在を見つめ、未来の自分を想い描く唯一の機会なのではないだろうか。そのための儀礼は、簡素ではあっても、やはり厳粛でなければならない。

註

- (1) 柳田國男「習入考」一九二九年（『柳田國男全集』第一七卷、一九九九年、筑摩書房、六三六頁）。
- (2) 家島町の婚姻儀礼の詳細は、八木透『婚姻と家族の民俗的構造』（二〇〇一年、吉川弘文館）、八木透編『日本の通過儀礼』（二〇〇一年、思文閣出版）を参照。
- (3) 大間知篤三『婚姻の民俗学』一九六七年（『大間知篤三著作集』第二卷、一九七五年、未来社、一八一頁）。

- (4) 大間知篤三『婚姻の民俗学』（詳細は前掲）一八二頁。
- (5) 『福井県史・資料編十五・民俗』一九八四年、福井県、一九二頁。
- (6) 『福井県史・資料編十五・民俗』（詳細は前掲）一九三頁。
- (7) 筆者調査。民俗学研究所編『改訂総合日本民俗語彙』第一巻、一九五五年。
- (8) 『長岡京市史・民俗編』一九九二年、長岡京市。
- (9) 『明治天皇紀』第九、一九七三年、吉川弘文館、八二三頁。
- (10) 『明治文化全集別巻・明治事物起原』一九六九年、日本評論社、一〇九頁。
- (11) 『明治文化全集別巻・明治事物起原』（詳細は前掲）一〇九頁。
- (12) 泉州地域の婚姻儀礼の詳細は、泉佐野市史民俗部会編『土丸の民俗』（泉佐野市史編さん委員会、一九九九年）、同編『長滝の民俗』（泉佐野市史編さん委員会、二〇〇一年）、八木透監修『熊取の民俗』（熊取町文化財保存財団、二〇〇一年）を参照。